第６０回愛知学院大学モーニングセミナー

「萬葉集の歌から古代を学ぶ！」

―平城遷都１３００年前の奈良時代を知る―

『万葉集の恋』

椙山女学園大学　国際コミュニケーション学部
表現文化学科　　教授　　大浦　誠士

2011年3月8日

『万葉集とは？』

現存最古の歌集

★最終的な成立は奈良時代後期か

★編纂開始は持統・文武天皇の時代
（700年ごろ）

★全20巻
4500首あまりの歌を収める

『万葉集』の時代（4期区分）

第１期（初期万葉）
　舒明朝（６２９年）～壬申の乱（６７２年）

第２期（柿本人麻呂の時代）
　天武朝（６７２年）～平城京遷都（７１０年）

第３期
　平城京遷都（７１０年）～天平５年（７３３年）
　※山上憶良の死

第４期（大伴家持の時代）
　天平５年（７３３年）～天平宝字３年（７５９年）
　※万葉集最終歌

大伴家持が因幡国守時代、

正月一日に郡司たちを招いて
正月の宴を催した時の歌

新(あら)たしき年の初めの
初春の今日降る雪の
いやしけ吉事(よごと)
(二十巻四五一六)

『万葉集』とその歌の特徴①

作者層の広さ

★天皇をはじめ皇族の歌（初期万葉）
天智天皇・天武天皇・鵜野皇女（持統天皇）・
有間皇子・大津皇子など
額田王（宮廷歌人の萌芽）

★宮廷歌人の歌（第2期～3期）
柿本人麻呂・山部赤人など

★貴族層の歌（奈良時代）
大伴旅人・山上憶良・大伴家持

★東歌・防人歌

★乞食者の歌

『万葉集』とその歌の特徴②

★歌のジャンルの多彩さ

儀礼的な歌　旅の歌　季節歌　宴席歌
恋の歌
伝説歌
死を悲しむ歌（公的挽歌・私的挽歌・辞世歌）
戯笑歌　物語的な歌
地方の歌

額田王

あかねさす紫野行き
標野行き野守は
見ずや君が袖振る

（一巻二十）

大海人皇子

紫のにほへる妹を
憎くあらば人妻故に
我恋ひめやも

（一巻二十一）

紫草

大海人皇子
（天武天皇）
┬十市皇女
額田王
┼？
天智天皇

天武天皇

『万葉集』の三大部立て

★雑歌

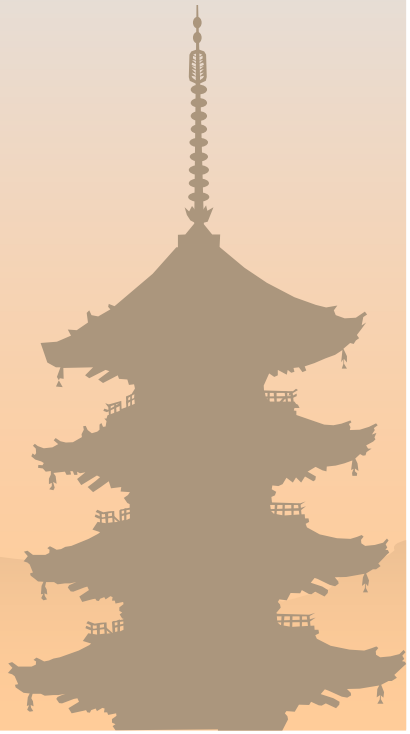
公的・儀礼的な歌　季節歌　旅の歌

★相聞

消息をたずねあう　恋の歌

★挽歌

人の死に関わる歌

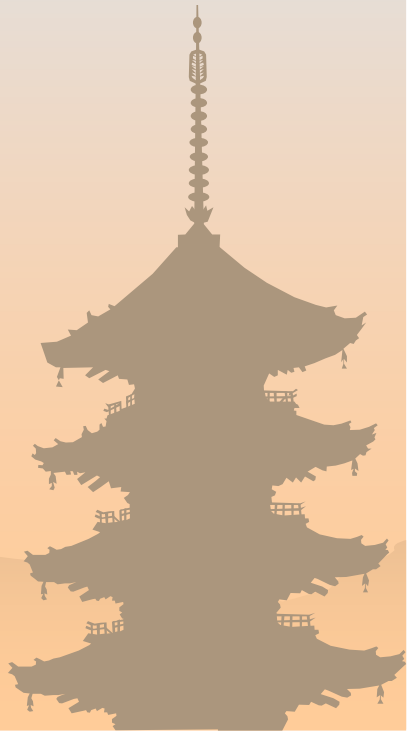


大津皇子

あしひきの山のしづくに
妹待つと我立ち濡れぬ
山のしづくに
（二巻一〇七）

石川郎女

我を待つと君が濡れけむ
あしひきの山のしづくに
ならましものを
（二巻一〇八）



★大津皇子が密かに石川郎女と
結ばれた時の歌

大船の津守が占に告らむとは
まさしに知りて我が二人寝し
（二巻一〇九）

★日並皇子（草壁皇子・天武時代の
皇太子が石川郎女に贈った歌

大名児を彼方野辺に刈る萱の
束の間も我忘れめや
（二巻一一〇）

※大名児は石川郎女の名

恋の習俗①

歌垣

紫は灰さすものぞ
海石榴市の八十の衢に
会へる児や誰
（十二巻三一〇一）

たらちねの母が呼ぶ名を
申さめど道行き人を
誰と知りてか
（十二巻三一〇二）

恋の習俗②

人目・人言

心には千重に百重に思へれど
人目を多み妹に逢はぬかも
（十二巻二九一〇）

人言を繁み言痛み
我が背子を目には見れども
逢ふよしもなし
（十二巻二九三八）

恋の習俗③

前兆・おまじない

眉根掻き鼻ひ紐解け待つらむか
いつかも見むと
思へる我れを
（十一巻二四〇八）

めづらしき君を見むとこそ
左手の弓取る方の
眉根掻きつれ
（十一巻二五七五）

我妹子に恋ひてすべなみ
白栲の袖返ししは
夢に見えきや
（十一巻二八一二）

我が背子が袖返す夜の
夢ならしまことも
君に逢ひたるごとし
（十一巻二八一三）

恋の習俗④　占い

玉桙の道行き占に占なへば
妹に逢はむと
我れに告りつも
（十一巻二五〇七）

夕占にも占にも告れる
今夜だに来まさぬ君を
いつとか待たむ
（十一巻二六一三）

月夜よみ門に出で立ち
足占して行く時さへや
妹に逢はずあらむ
（十二巻三〇〇六）

古典を読むとは？

歌＝心情の「容れ物」
「共感」を生み出す装置
※「共感」≠作者の心

古典＝様々な時代の様々な人々の「共感」
を経てきたテキスト
※古典 ⟷ 古い文献

古代和歌を読むこと＝実は自分の心を読むこと